

聖なる人々の教団

——現代ザンジバルにおけるハドラミー・サイイドの役割——

平成18年入学

派遣先国：タンザニア

朝田 郁

キーワード：スワヒリ，アラブ，ハドラミー・サイイド，神秘主義，タリーカ・アラウィーヤ

対象とする問題の概要

インド洋では、季節によって風向きを変えるモンスーン（季節風）を利用した遠距離の航海が可能であったことから、紀元前後から東アフリカ、西アジア、インド、東アジアが交易を通じ相互に結び付いていた。アラビア半島南部と東アフリカ沿岸部の間にも、アラブの移民活動によってムスリムの広域ネットワークが築かれており、中でもタンザニア連合共和国の島嶼部に位置するザンジバルは、この地域におけるイスラーム文化の一大拠点となってきた。ところが、ザンジバルで1964年に生じた革命の結果、現地ムスリム社会の構造は根底から覆されることになる。アフリカ系住民を主体とする当時の政府は社会主義を標榜していたことから、イスラーム勢力を徹底的に弾圧しその文化的遺産を破壊した。しかしながら、近年になって世界的なイスラーム復興運動に連動する形で、この地域のムスリムたちの動きが再び活発化し、非アラブ地域であるがゆえの問題や現象も可視化しつつある。

研究目的

フィールドワーク実施に先立って設定した課題は、東アフリカのザンジバルを舞台に展開してきたイスラーム神秘主義教団、タリーカ・アラウィーヤの宗教実践と社会活動を記述することである。

ザンジバルにはアラビア半島南部の国、イエメンのハドラマウト地方からアラブが移住しており、出身地にちなんで彼らはハドラミーと呼ばれている。これらハドラミーの中でも預言者ムハンマドの血を引く直系親族は、サイイドまたはシャリーフという肩書きを保有し、ムスリム社会の中で一定の尊崇の念をもって迎えられている。タリーカ・アラウィーヤは、彼らサイイドたちを中心メンバーとして成立した教団であり、東アフリカにおいてはイスラーム浸透の過程に大きく関わってきた。

本研究は、これまで歴史学以外の分野では先行研究がなかったタリーカ・アラウィーヤについて、文化人類学的アプローチを中心にした地域研究によって、その現在の姿に迫ろうとするものである。

フィールドワークから得られた知見について

イスラーム神秘主義教団の宗教実践と社会活動を記述するという目的に従い、調査の初期段階では指導者の系統や系譜、タリーカ・アラウィーヤの教義、宗教儀式と規定、メンバーの社会的・政治的活動、教団活動の経済的基盤、組織の構造などの諸項目について、インタビューや参与観察に基づき調査を進めた。聞き取りの対象となったのは、主としてシャイフと呼ばれる教団の指導者たちである。



写真1. 儀礼を行うタリーカ・アラウィーヤのメンバー

調査の結果明らかになったタリーカ・アラウィーヤの姿は、渡航前に確認した文献資料等をもとに得られたイメージとはおよそかけ離れたものであった。学説的には、どのイスラーム神秘主義教団においても入会に際しては儀礼を行い、イジャーザと呼ばれる免状を付与された者が組織のメンバーになるとされているが、タリーカ・アラウィーヤのシャイフの話では、実際にそのような手続きを取ることほとんどないということであった。それどころか、人々はムスリムである限りはイジャーザを取得することなく自由に教団活動へ参加し、メンバーとして各種の宗教儀礼を行っていたのである。



写真2. イスラームの専門教育を行う学校

タリーカ・アラウィーヤに関わる者は、みな異口同音にアラウィーの本質とは「教え、学ぶ」ことであると語る。タリーカはアラビア語で「道」を意味する言葉であり、タリーカ・アラウィーヤとは字句通りに訳すなら「アラウィーの道」ということになる。シャイフたちは、知を求めてやって来る

者を迎え入れ、アラウィーの道を生きるとはいかなることか教え解く。そのような知者を前にした時、調査前から準備していた質問リストなどすぐに役に立たなくなってしまった。こちらに出来ることは、彼らが語る言葉に静かに耳を傾け、その教えを聞き漏らすまいとメモを取るくらいであった。

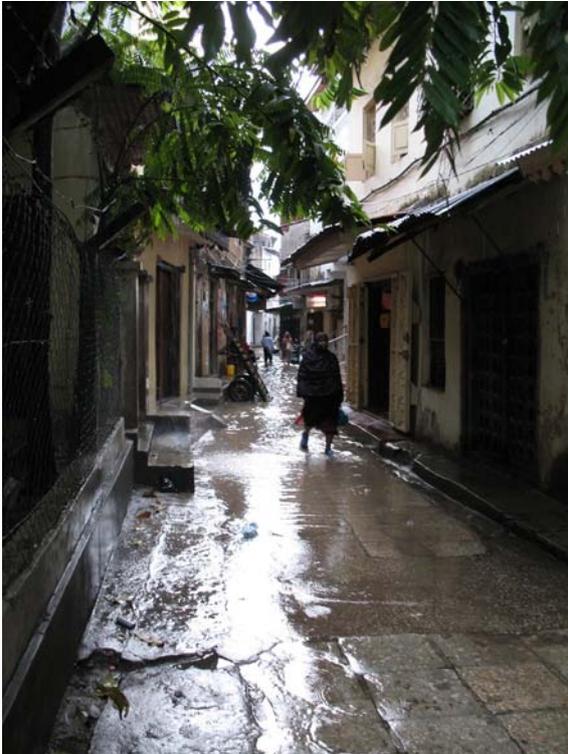


写真3. 雨の日のザンジバルの町並み

日本語では一般にイスラーム神秘主義教団と訳されることの多いタリーカであるが、調査の展開はこの神秘主義や教団とは何であるのかという、より根源的な問いに行きつく結果となったのである。

今後の展開・反省点

ハドラミーはインド洋に面した各地に定住しており、彼らを対象とした研究も移民活動の広がりやを反映して地域的な多様性を示している。そのような流れの中で、これまで手付かずのまま残されてきた東アフリカの情報を提供することが本研究の持つねらいの一つであった。しかし、本派遣によるフィールドワークを進める過程では、従来のイスラーム研究において自明視されてきたことに対して疑問符を突き付けるような事実は何度も遭遇した。そこで、本年度に提出予定の博士予備論文では、研究上の空白を埋めるという、地域研究としては控えめな姿勢にとどまらず、イスラーム学における最新の議論においても資するところがあるよう努めていきたい。ハドラミー移民を対象とする研究は発展的に続けていく予定で、今後は彼らが持つモビリティとネットワークに注目し、タンザニアを出発地に他の東アフリカ都市やアラビア半島まで視野に入れた地域研究を行っていきたい。